

ルカ福音書 19:1 イエスはエリコに入り、町を歩いておられた。

2 そこにザアカイという人がいた。この人は徴税人の頭で、金持ちであった。

3 イエスがどんな人か見ようとしたが、背が低かったので、群衆に遮られて見ることができなかった。4 それで、イエスを見るために、走って先回りし、いちじく桑の木に登った。そこを通り過ぎようとしておられたからである。

5 イエスはその場所に来ると、上を見上げて言われた。「ザアカイ、急いで降りて来なさい。今日は、ぜひあなたの家に泊まりたい。」6 ザアカイは急いで降りて来て、喜んでイエスを迎えた。

7 これを見た人たちは皆つぶやいた。「あの人は罪深い男のところに行って宿をとった。」8 しかし、ザアカイは立ち上がって、主に言った。「主よ、わたしは財産の半分を貧しい人々に施します。また、だれかから何かだまし取っていたら、それを四倍にして返します。」

9 イエスは言われた。「今日、救いがこの家を訪れた。この人もアブラハムの子なのだから。10 人の子は、失われたものを捜して救うために来たのである。」

1 みんなの物語

ろうそくが二本、灯りました。2000年前、神の御子が私達の間にも宿られた事を思い起しつつ、やがて終わりの日に来られるイエス・キリストを待ち望む待降節、皆さんと共にルカによる福音書第19章のザアカイの物語に耳を澄ませ礼拝できる恵みを、天の父なる御神に感謝します。先ほどお読みしたザアカイの物語、私は、教会学校で子供たちに向けて度々、語られるほほえましい物語だと思っていました。しかし、今回、説教準備の為、改めてこの物語を読んだ時に、それが誤解だと気づかされたのです。ザアカイに向けて、「ザアカイ、急いで降りてきなさい。私は今日、あなたの所に泊まる事になっている」と主イエスが語り掛ける言葉、これは、私自身に語られているようだったからです。私だけではない、この礼拝へと集められたお一人お一人に主イエスは語り掛ける。「急いで下りてきなさい。今日、私はあなたの所に泊まる事になっている。」それは決して聞き間違いではないのだと思います。この物語にはイエス・キリストとの出会いのエッセンスが詰まっているからです。だからこそ、2000年の間、教会で子供から大人まで愛され続けてきました。これは、ザアカイの物語、かつて主イエスと出会い、今も出会っている人々、これから主と出会う人々、私達の物語です。

2 ザアカイの動機

先週、エリコの町は死海周辺のオアシスであり、イスラエル各地からエルサレムへ向かう人々はみな、この町を通過したと話しました。つまり、エリコは、交通の要衝の町であり、通行税を取り立てる税関もあったようです。その町で徴税人の頭であったのがザアカイ、現代で言えば、税務署長です。しかし、ローマ帝国の役人ではない、ザアカイが、ローマ帝国から税金業務を請負い、人を使って税を取り立てていたようです。勿論、他にも、物品税や人头税、住民税などもありますから、ザアカイ達はかなり忙しかった筈です。ローマ帝国の力をバックに、様々な税金に、法外な手数料も上乘せして取り立てていた徴税人。そのトップですから、ザアカイはかなり金持ち。しかし、町の人々からは嫌われていました。やっている事を考えれば、それは致し方ない事でしょう。「外国人とも親しく付き合うとは、神の掟を無視する罪深い奴だ」と律法に厳しい人々にも軽蔑されていましたし、イスラエル独立を願う人々からもよく思われてはいませんでした。

その頃、噂のナザレ人イエスが、巡礼の群衆を引き連れてエリコの町へとやって来ました。一行は神を賛美しつつエリコの町へと入ってきたのだと思います。エリコは大騒ぎ。「ナザレ人イエスというお方は、町の門の所で物乞いをしていたあのバルティマイの目を開けたんだ、真の救い主、メシアに違いない。」一目でイエスの姿を見ようと沿道に押し寄せてくる人、人、人。そんな群衆のどよめきの中を主イエスは、エルサレムへ向かってエリコの町を通り過ぎようとしておられました。ザアカイも、イエスの一行が通る道へと出てみるのですが、すごい人ばかりです。背が低い彼に見えるのは、波のように重なる人の後ろ姿。ザアカイは税務署所長、お金持ちで地位もある有名人です。ですが、群衆は、ザアカイがいくら「ちょっと開けてくれ」と叫んでも知らん顔、徹底的に無視します。その無言の背中が、こう言っているようです。「罪深い徴税人と救い主になんの関係があるんだ。お前に救い主を見る資格なんてない！」町の人々は、後ろ姿でザアカイを冷たく拒否していました。

が、さすがに徴税人のトップに上り詰めるザアカイ、そんな嫌がらせではへこたれません。「見ろよ、あの方だ！」最前列からそんな声が聞こえて来た時、ザアカイは、行列の先回りしようと走り出します。「この先の道の側にあるイチジク桑に登れば、救い主とやらが拝める。」そう思いついたザアカイは一目散に走り出し、イチジク桑の木の枝に飛び乗って、イエス一行を見下ろせる所まで登ります。イチジク桑の木は、高さが10メートルから15メートルという大木であり、しかも、枝が非常に低い位置から出ているので、木登りしやすい木です。しかし、当時のユダヤ社会では、地位も財産もあるよい大人が走るのとは、みっともない行いだと考えられていました。ましてや、木に登るなんてのもっての他。それは現代日本でも同じでしょう。大の大人が木登りしていれば「いい歳して、

何を子どもじみた事を」と眉をひそめられるのがオチです。この時も、人々はザアカイの行いをみっともない、とバカにしてわらっていたのだと思います。ザアカイもそれが分からない人ではない。では、どうしてザアカイは、人々に笑われるとわかっていて、必死に走って先回りし木に登ってまでして、救い主と噂される男を見ようとしたのでしょうか？主イエスが徴税人や罪人に優しいお方で、これまでもたびたび徴税人達と食事を共にしていた事、弟子達の中には、かつての徴税人レビがいる事もザアカイは聞いて知っていたのでしょうか。しかし、だからと言って、彼は、そんなにイエスと親しくなりたいたいと思っていたわけではないようです。もし、本当にそう思っているなら、部下を使って無理やりでも人々をけちらし、イエスさまの前に出て行って、「どうが我が家において下さい」と言ったでしょう。しかし、彼は、ただ、木に登って主イエスを遠くから観察しようとしただけ。主イエスに興味はある、だが、関わりはなりたくはない、というのがザアカイの様子なのです。ですが、そうであれば、群衆に冷たく阻まれても諦めず、木に登ってまで、イエスを見ようとしたのでしょうか。

マルティン・ルターは、この点について、6節「**ザアカイは急いで降りて来て、喜んでイエスを迎えた。**」の「喜んで」に注目します。実は6節は、原文では、「喜んで」が強調された構文です。だから、ルターは6節を次のように訳しました。「**そして彼は、急いで降りて来て、イエスを迎え入れた、喜びをもって。**」そして、次のように取り次いでいます。「ザアカイはキリストが来られる事を求めてはいなかった。しかし、その実、彼はキリストを求めていたのである。」「ザアカイはイエスを見るだけで、あとは、隠れたままでいる事に満足しようとした。あの名高いキリストと深く知り合うに値する値打ちなど自分には全くない、誰よりも自分がそれに値しない者である事を彼は承知していたのである。しかし、それでも、彼が救い主を慕い求めていた事は、主イエスから声をかけられ宿泊を申し込まれた時、言葉にならないような大きな喜びをもって迎えた事から、明らかなのである。」

私はこのルターの解釈を読んで、本当にその通りだと思いました。ザアカイは自分の本当の気持ち、救いを求めてうめく自分に気づいていなかったのです。彼が、どうして徴税人の頭にまでなったのかは分かりません。もともと徴税人の家に生まれたのかもしれないし、貧乏に打ちのめされ、一念発起して徴税人を始め、苦勞して成り上がったのかもしれない。どちらにしろ、ザアカイとは、「正義の人」という意味がある名前ですが、気づけば、とても「正義の人」とは言えない生き方をしている。世間の人々が「穢れた罪人だ」と軽蔑の目を向けてくれば、「貧乏人が何を偉そうに」と反感を抱くのですが、しかし、自分がしている事が決してほめられた事ではない、いくら徴税人に優しい救い主でも、こんな自分は拒否されるかもしれない、近づいて拒否されて傷つくのは嫌だ、しかし、それでもなんとしてもイエスという方を見たい、それが彼の思いであったでしょう。神から遠くあるのは彼自身が一番よく知っていた。ザアカイは、

彼自身の命を喜べていなかったのだと思うのです。だから、「イエスに近づきたくはないが、なんとかして一目だけでもイエスという人を見たい」それは、ザアカイが、自分を愛し受け入れてくれる救い主を求めていた証でした、それは本人さえも気づかないほど心の深い所にある想い、深い所にあるからこそ、強い思いでありました。だから、ザアカイは、なりふり構わずに走りいちじく桑の太枝に飛び乗って、イエスを見ようとしたのです。

しかし、見いだされたのは、ナザレ人イエスではなく、ザアカイでありました。主イエスが、イチジク桑の葉影にザアカイを見出してくださった。そして、「ザアカイよ」と呼びかけます。この時、ザアカイは、本当に久しぶりに自分の魂に届く呼びかけを聞いた想いではなかったでしょうか。ああ、木の下におられるあのお方は私を求めてくださっている、私の名を呼んでくださっている。ザアカイの胸を喜びが満ち溢れ、滴り落ちる。この喜びはなんなんだ？ そうか、私はこのお方を知らず知らずのうちに求め慕っていたのだ、ザアカイは、主イエスの呼びかけによって、救いを求めていた自分を新しく発見したのです。その日の朝には、彼は、自分にこんな事が起こるなんて、彼は思いもしなかったでしょう。これはまさに私達の実感だと思います。今日、ここに集まってきている私達のうち、誰が自分の計画通りに神を見出し信じ、自分の計画通りに主イエスを見出し信じた、と思っている人は一人もいないはずです。仮に計画を立てた人がいたとしても、実はこの私がそうなのですが、それよりも遥かに素晴らしい仕方で、神の恵みへと引きずりこまれた、それがイエス・キリストに見いだされた者、救われた者誰もが抱く実感だと思います。

3 見いだされたザアカイ

ザアカイが、全く新しい自分、神に深く愛されてある自分を発見したのは、主イエスの5節の言葉です。「ザアカイ、急いで降りてきなさい。私は今夜、あなたの所に泊まる事になっている。」これは、聖書協会共同訳の翻訳です。新共同訳では、「ザアカイ、急いで降りて来なさい。今日は、ぜひあなたの家に泊まりたい。」です。新共同訳ですと、ザアカイの家に泊まるのは、主イエスの強い願いのようです。それも間違いではないのでしょうけれども、原文のニュアンスとはだいぶ違います。原文を直訳すれば「今日、私はあなたの所に泊まらねばならない」です。「～しななければならない」という単語、英語で言えば「must」が使われているのです。この単語が聖書で使われる時は、天の御神の強いゆるぎないご意志を示す時であり、主イエスが十字架と復活の預言をされる時にも出てきます。ルカ福音書では、13:33、「しかし、今日も明日も、またその次の日も、わたしは進んでいかねばならない。預言者がエルサレムで死ぬ事はあるからだ」の「いかねばならない」で使われています。主イエスの意思ではなく、父なる神が決めた道筋を歩まねばならない、という時に

使われているのです。父なる神が御子をこの地上に宿らせて以来、決心しておられた事、どうしてもやり遂げなければならない事を、神はやり遂げようとしておられる、そして、主イエスは、十字架までそれに従うのです。ですから、今日の5節の「今日、私はあなたの所に泊まらねばならない」という言葉は、神の御子イエスの身体を十字架上にさき、槍で突いて無残に殺してでも、私達人間を救いたいという、これ以上ないほどの強く激しい、神の御心を現わす言葉だと言えます。神は人を愛する事において一ミリも譲歩しようとはなさらない、まさに、十字架の激しさをもって、怒涛のように神がザアカイを目指してやってきておられます。この神の熱くたぎる想いに答えて主イエスはこの地上にやってこられ、ザアカイのように、私達のように、神を忘れてさまよい出ている迷子一人一人を探し求め、見つけて、神のもとへと連れ帰ろうとされています。

失われた者を捜し求める救い主は、エリコの町のいちじく桑の葉影に、ザアカイを見出した。そして、「ザアカイよ、私はあなたを捜し求めて来た。早く下りておいで。あなたの家に行こう、そうしてあなたと共にいよう。その為に私は来た。」と呼んで、ザアカイを求めてくださいました。彼は喜びに満たされました。本当に信ずべき人と出会えた喜び、本当の自分を見出してもらった喜び。主イエスに見いだされる事によって、ザアカイは自分の本当の値打ちに気づかされました。神が常識外れに愛して求めてくださる自分であると気づかされました。

4 ザアカイの回心

しかし、周りの人にはそれは分からない。ザアカイが沿道の最前列に出る事を阻んだ群衆は、イエスの言葉を聴いて驚き、呟きます。「あの人は罪深い男のところに行って宿をとった。」この呟きはあちこちから聞かれたでしょう。神を賛美する声も陰を潜めます。当然、救い主と出会い喜びにむせぶザアカイの耳にも入りました。「罪深い男だ」という人々の非難は、これまでもいやというほど聞いた言葉であり、反発してきた言葉であったでしょう。しかし、今回は違いました。沿道の人々の「罪深い男なのに」という呟きを聞いた時、素直にそれを受け入れる事ができたのです。「ああ、私は、本当に罪深い者だ」と思った。「そうだ、私は罪深い。しかし、この方は、そんな私の所に来てくださる、自分では直視できないような底の底、人間では降りてこれないような深みにまで、降りてきてくださる。真の救い主だ。」と、真の救い主はどういうお方かに気づかされたのです。ザアカイは、罪の中にあって、弱さの中にあって、その葉陰に隠れようとしたのに、主イエスに見いだされた。そして、彼も又、真の救い主を見出したのです。クリスマスの出来事とザアカイの出会いでした。

私達もまた主イエスに見いだされる時、私達もまた、救い主を見出し、そして、救い主が来てくれた故に、罪や弱さを素直に受け入れる心へと変えられる、そういってもよいのだと思います。そのようにして、主イエスは罪に生きるしかない、弱さに留まるしかない私達を引き上げてくださいます。ザアカイはここで「このままの自分でいいわけがない。主の愛に応えたい。変わりたい、神よ、憐れんでください！」と心の中で祈った、と想像する事は許されるでしょう。だから彼は、喜んで自分の財産の半分を貧しい人々に分け与え、不正の取り立ては四倍にして返済したいと思いが与えられた。これは律法に定められている償いよりも遥かに多い償いです。ザアカイから出て来た思いではない、神から与えられた思い。だから、彼は、立ちあがって、イエスに向かつて宣言します。「主よ、わたしは財産の半分を貧しい人々に施します。また、だれかから何かだまし取っていたら、それを四倍にして返します。」この時、ザアカイが、「イエスさま」と呼びかけるのではなく、「主よ」と呼び掛けているのは興味深い事です。木から降りて来たザアカイ、神に愛する喜びのうちに、そうとは気づかぬまま救い主に従う者へと変えられていたのです。これもまた、信仰者のリアルな姿だと思えます。私達一人一人を強く求める神を知った人は、もう天の神のみ心を他人事にはできない、木の上からのうのと観察する者ではいられない、神の義なる愛に巻き込まれ、救い主なる主イエスの後に従って行く者へと変えられるのだと思います。自分を深く愛し救ってくださる救い主の想いに、救い主と共に生きる、人間として真に幸せな生き方だと思えます。

キリストのもたらす救いは、真の救いでありますから、一人の救いには、留まりません。主イエスは9節で「**救いがこの家に訪れた**」と仰いました。「救いがこの男に訪れた」ではなく、「この家に訪れた」、ザアカイに訪れた救いは、彼を通して、彼の家族や使用人、同じ家で生活する関係の深い者達に広がり行くのです。更には、彼の財産を分け与えられた貧しい人々、不正な取引で四倍の弁償を受けた人々にも広がっていきます。エリコの町に広がっていきます。そして、ザアカイを通じて多くの人が、自分を捜し求める主に見いだされていきます。

5 今日、救いが訪れた。

「今日、救いがこの家を訪れた。」この言葉は、クリスマスの夜、羊飼いに天使たちが告げた「今日、**ダビデの町であなただの救い主が生まれた**」という言葉と響き合います。救いの訪れ、それは、昨日でもない、明日でもない、今日です。まるで、救いの訪れは、たった一度限りの出来事ではなく、いつでも、「今日」起こる事だと言っているようです。この後、ザアカイはどうしたのでしょうか。きっと、宣言通りに貧しい人々に財産を分け与え、過去の過ちをきちんと

四倍にして償ったでしょう。それは、困難の多い骨の折れる事だったと思います。ですが、日々、訪れてくださる救いがザアカイを支え導いた。イエス様と新たに会う事によって、ザアカイは、変えられ続けて行ったのです。やがて、彼はカイサリアの教会の指導者となったと語り伝えられています。カイサリアの教会で彼は、今日のイエス・キリストとの最初の出会いを繰り返し人々に語ったのでしょ。そして、人々はそれを自分の物語として聴き続けました。この物語を通じて、新たにキリストと出逢い続けた、キリストに見出され続けたのです。それは今も起こっています。こうしてイエス・キリストを通じて父なる神を礼拝している今こそ、救いの時、天の御神が私達一人一人を訪れ見出してくださる時です。主イエスは、今日、私達一人一人のもとを訪れ、私達を見出して名前を呼び、「今日、私はあなたの所に泊まる事になっている」と仰ってください。自分を小さく小さくして、それぞれの心に救い主をお迎えする事ができますように、と祈り願います。